

直筆の歌詞発見—水沢高校第一応援歌—

水高の逍遙歌の謎を解く本を4月に発行したところ、作詞者の二男、阿部研也氏（埼玉県在住）から「父の直筆の第一応援歌の歌詞がある」とのメールをいただきました。

戦後開校した水沢高校で初めて制作された歌は「逍遙歌」。次に作られたのは「第一応援歌」です。作詞は水高の英語教師、阿部庄一郎先生です。曲はいずれも長野県の旧制松本高校思誠寮の寮歌で、逍遙歌は「春寂寥」、第一応援歌は「ああ青春」が元歌になっています。

逍遙歌については「逍遙歌—奥州・仙台の謎解きシリーズ2」で詳しく紹介していますが、第一応援歌は歌詞のみの掲載。同じ思誠寮の歌ながら、その経過は謎のままでした。添付された直筆の第一応援歌を見てとても驚きました。というのは「第一応援歌」と疑うこともなかったものが、表題が違っていたのです。「水高選手応援歌」と書かれていました。わら半紙に太い万年筆で書かれたその歌詞は、73年前の年月を経て目の前に現れたのです。「阿部庄一郎作詞」とともに、4番までのすべての歌詞は丁寧に書かれてありました。

第二応援歌が制作される以前は、応援歌に順番を付ける必要がないというのを今更ながら気づいたのです。「水高選手」という表題は応援する対象をストレートに明示しています。現在の歌詞の「広野に燃ゆる」は「萌ゆる」、「我等が選手」は「我等の選手」、また「郭公空にこだまして」は「木魂して」、「雪のしじまにとざされて」は「沈黙にとざされて」など元々は漢字であり、また意味が伝わるようにルビを振って表現されています。生徒の理解、常用漢字の使用などによって変化してきたのでしょうか…。阿部研也氏は「変わった方がいい部分、原詞の方がいい部分がある。父が変更した可能性もあるかも知れない」と語っています。また、「当時、教え子が逍遙歌を作詞した阿部庄さんに迷わず頼みに行った」という経過があります。「水高を離れて61年経つが、私の原点でもある水沢にこよなき郷愁を覚えながら、今でもふと口ずさむ応援歌が好き」と故郷への思いを語ってくれました。

* 逍遙歌の改訂版は、阿部庄一郎先生の家族から提供いただいた手記や写真が決め手となり発行に至りました。写真をデータ化する作業を通じて徐々に記憶がよみがえり、「父がわら半紙に書いた直筆の第一応援歌がある」との連絡をいただきました。添付されたデータを開くと、そこには第一応援歌の原点がありました。

逍遙歌の謎解き経過

地元学というのは、地域の身近な歴史や文化を地元の人たちが探り、一緒に物語にしているものです。それぞれ関心がある事、物、人などを調べ、地域の魅力や誇りを育んでいくまちづくり活動でもあります。

テーマによっては当たり前のこと、身近過ぎることもあるでしょう。しかし、視点を変え、また個々の素材をつなげると、価値ある地域資源として輝くこともあります。水沢高校の逍遙歌もその一つかも知れません。

この逍遙歌の物語は、第二次世界大戦後の学制改革によって創立された新制高校での教師と生徒の埋もれていた歴史でもありました。

水沢高校がある奥州市は、奥羽山脈と北上高地の大自然に囲まれ、その間を北上川が悠々と流れ、大和朝廷の時代は阿弭流為（アテルイ）が朝廷軍を迎え撃ち、平泉文化を創造した藤原清衡が豊田城を構えた地です。また、郷土の偉人、高野長英、後藤新平、斎藤實、地球の極運動観測方程式に Z 項を加えた旧緯度観測所の木村栄所長、最近ではブラックホールを世界で初めて視覚化した国立天文台・水沢 VLBI 観測所が知られています。

「旭日の国の東北、北緯三十九度八分」は、前身の水沢高等女学校の校歌。緯度観測所の位置から始まっています。終戦直後、旧制水沢中学校が間借りの校舎でスタート。新制中学校を経て昭和 23 年 4 月に開校したのが水沢高校です。生徒の編入、開校、入学など慌ただしい時期に生まれた歌があります。それは校歌でもなく、応援歌でもなく、逍遙歌でした。特に創立直後に入学した生徒にとっては思い出深い歌でした。しかし、作詞、作曲の経過はあまり知られていませんでした。それが明らかになるきっかけは仙台で開かれた同窓会で作詞者の長男、阿部琢也さんとの出会いでした。興味深いお話を伺い、これは記録に残す必要があると、自称地元学応援団の使命感に満ち溢れてきたのでした。

逍遙歌を作詞したのは阿部庄一郎先生です。明治 39 年、東京下町生まれで、旧制一高理科で学び、一時は文学の道を志したといます。東京で暮らしていた阿部先生一家は、東京で空襲に遭い仙台に疎開、一日違いで空襲を免れ昭和 20 年 7 月に水沢へ転居したそうです。終戦直後に水沢高校の英語教師として赴任しています。ここで出会ったのが河野光男校長です。明治 38 年 2 月、広島県生まれ。東京大学卒業後、水沢中学校、水沢高校を経て長野県師範学校（現信州大学教育学部）の教授に転任しています。専門は英語、英文学、シェークスピア。英語教師としてのご縁が深まったことでしょう。

旧制中学から移行した高校と違い、新制高校の水沢高校には校歌はありません。全国の新制高校も事情は同じで、旧制高校の寮歌などのメロディに独自に作詞しての歌作りが始まりました。宮城県では仙台二高、仙台三高、白石高校、角田高校が旧制二高の凱歌を導入しています。野球の試合では同じメロディが双方から流れてきます。こうした中で、なぜ水沢高校は旧制松本高校寮歌だったのでしょうか。全国的にも例はありません。そこには阿部庄一郎先生と河野光男校長の交流があったことは間違いないと考えています。逍遙歌のメロディは旧制松本高校思誠寮寮歌「春寂寥」です。当時の学生、吉田実作詞、浜徳太郎作曲によるものです。最近では信州大学の入学式で学生のオーケストラと合唱団が披露しています。

阿部庄一郎先生は英語教師ですが、元祖受験屋とも呼ばれ、他の科目での造詣が深く、生徒たちには文学を含む国語や数学に及ぶまで指導があったといます。仙台で活躍している歌人の佐藤通雅氏は薫陶を受けた一人。東北新幹線開業の際の週刊朝日の特集で石川啄木、宮沢賢治、高村光太郎に触れながら逍遙歌の作詞者を紹介しています。逍遙歌がいまでも生徒の心に響いているのは、幅広い知識と深い文学への理解のもとに作られたものと考

えています。各地の同窓会では校歌とともに第一応援歌、逍遥歌が合唱されています。逍遥歌は、校歌、応援歌とともに、仲間や教師と過ごした青春の歌で、世代を超えていつまでも歌えることができます。故郷や母校をつなぎ、誇りを未来の生徒に伝えるチカラがある歌でもあります。

逍遥歌の次に制作されたのは応援歌、さらに水高賛歌。いずれも阿部庄一郎先生の作詞です。第一応援歌のメロディも旧制松本高校思誠寮寮歌「ああ青春」（吉村武生作詞、片山尚歌作曲）です。

水高音頭は旧制浦和高等学校自治寮音頭「春の武蔵野」（佐藤卓郎作詞、金田一春彦作曲）に生徒が作詞しています。優勝歌は旧制二高の大正 11 年対仙台高等工業学校野球戦凱歌（湊勇雄作詞、閑歳俊雄作曲）」ですが、作詞者は不明です。

また第二応援歌以降は生徒と教師によるものがほとんどです。第四応援歌は筆者の同級生が作詞、音楽教師の小笠原勇美先生作曲です。